

## ロレンスの意図 中編小説『太陽』から

著者	近藤 真理
著者別名	KONDOU Mari
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	52
ページ	461-477
発行年	2015
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00008710/">http://id.nii.ac.jp/1060/00008710/</a>

## ロレンスの意図 ——中編小説『太陽』から——

文学研究科英語コミュニケーション専攻博士後期課程満期退学

近藤 真理

### 序章

第50集東洋大学大学院紀要論文ではロレンス中編小説『狐』を取り上げ、ロレンスの女性嫌悪の観点から、『狐』の結末が曖昧な理由を掘り下げて調査していった。実は、『狐』以外にも、登場人物について幾分曖昧な描写が含まれており、その曖昧性が論点となっている作品に、中編小説『太陽』が挙げられる。ロレンスが実際訪れた、イタリアのシチリアが舞台となっていて、その内容は、ニューヨークで暮らす主人公ジュリエットが文明社会から飛び出して、イタリアのシチリア島での日光浴を通じて本来の人間らしさを取り戻していく過程が肉感的な農夫との淡い恋を通じながら描かれている。「太陽の光」と「原始的な生活」のおかげでジュリエットはノイローゼから回復していくのだ。

そこで、今回の論文では、イタリアのシチリアの熱い太陽を背景に繰り広げられる男女の恋愛模様を描き出したロレンスの作品に中編小説『太陽』について論述していきたい。

現代病で悩むジュリエット、彼女を取り巻く、夫のモーリス、ジュリエットが転地先で恋焦がれる農夫の人物像を浮き彫りにし、転地前と転地後のジュリエットの変遷を見ながら、この三角関係から推察できる作者ロレンスの狙いを調査していきたいと思う。最終的には、『太陽』の曖昧性を深く掘り下げることで、ロレンスの深層心理を浮き彫りにしていきたい。

### 第一章 人物像

#### 1. ジュリエットの変化 眼差

ニューヨークでの暮らしに心身共々疲れた主人公ジュリエットは、主治医の勧めで転地を測る。イタリアのシチリア島では太陽の光が眩しく、ニューヨークでは決して体感できない自然との一体化を感じることができた。このような状況下で心も体も解放されていき、凝り固まった疲れも次第に消えていった。そんな中ジュリエットはある農夫と出会い心も体ものほせ上がるが、夫モーリスが現れ、農夫との未来を断念せざるを得なかった。そして、ニュ

ーヨークに戻り文明社会に生きる夫モーリスとの子供を産むのだらうとジュリエットは諦観するのだった。

要所、要所でヘビが登場するが、イメージ・シンボル辞典によればヘビには「宇宙、エネルギー」といったイメージが込められている。これらは、太陽の下で女性性を回復していくジュリエットの置かれた状況を示唆している。転地前とは見違えるように生命力を増したジュリエットを見れば「エネルギー」に満ち溢れている様子は一目瞭然だ。「宇宙」に関して言えば、この作品のタイトルにもなっている太陽が合致し、また、月の満ち欠けが原因で生じるとされた「狂気」もジュリエットの持つ冒頭部での攻撃性と重なっているのが分かる。さらに、「月」のイメージは男性と女性の両方の意味を持ち合わせており、母権社会で活躍する女性の男性らしさが起因である。

これらの意味以外に、「生命、女性原理、母、無意識、苦しみ」と表記しており、前半部分の子供に対し過度な責任を持って自身を窮屈な立場に置いていたジュリエットと一致しており、「母」の役割を荷うことが精神的な負担と感じていた彼女の悩みを彷彿させる。子に対して専制的に振る舞ってしまう原因はこのような精神的な圧迫感、義務感によって心が縛られているからだろう。さらに、冒頭部分で病的なまでに攻撃的に母親に、“Do you want to kill me?”と嘯みついていたジュリエットはヒステリーの可能性が大いに疑われる状態であった。興味深いことに「ヒステリー」の語源はギリシア語で子宮を意味し、子宮の異常がヒステリーを引き起こすと考えられていた。極度に反応して感情的になる様子は月経前の緊張状態を仄めかしており、「月」と「女性」との結びつきに狂気が根底に流れているのが伺える。このように、ジュリエットの特徴ならび、物語の核となる部分が「ヘビ」が持つイメージと大きく一致していることが判明する。

それでは、太陽の下で、無意識のうちに恍惚状態へと導かれ、内に秘められた女性性の開花とともに見られるジュリエットの言動はいかなるものか。転地後、ジュリエットは、裸体で太陽に身をさらす。体内に太陽の光を取り込むことで、肉感的な暖かさを得ていく。

She could feel the sun penetrating into her bones ; nay, further, even into her emotions and thoughts. The dark tensions of her emotion began to give way, the cold dark clots of her thoughts began to dissolve. She was beginning to be warm right through. Turning over, she let her shoulders lie in the sun, her loins, the backs of her thighs, even her heels. And she lay half stunned with the strangeness of the thing that was happening to her. Her weary, chilled heart was melting, and in melting, evaporating. Only her womb remained tense and resistant, the eternal resistance. It would resist even the sun. (P426)

骨の髄まで太陽の光が浸透していく様子が描かれており、心も体も火照り出し、ジュリエットのうっとりとした恍惚感に包み込まれている姿が伝わる場面である。だが、子宮をのみ残した状態で日光浴は進んでおり、ジュリエットの頑なな意志で子宮を太陽の光から守っているようだ。

「自然状態」に身を置くことであらゆる社会的束縛を免れ、文明社会から大いに解放されていくジュリエットの様子が読者の印象に強く残る。自由を獲得し、「男性」からの視線に無関心になればなるほど、心は解き放たれ、次第に子供への接し方も、自発的な、本来あるべき邪心を省いた形で行われるようになる。すなわち、母親と子供との「支配—被支配」関係はなくなり、子供も伸びやかに自然と戯れるだけの動物性、野生性を身に付けていく。そして、母が子供から解放されていくのに比例して、子供も母から自由になる。母と子が原始的な生活に溶け込み始めると、ヘビが登場する。ここでのヘビは、人間以外の動物とも共生していく寛容さを兼ね備え始めた母子の姿を反映している。人工的なものを一切排除し、大自然の中で生きていく強さ、本来人間に備わっている原始性を獲得したジュリエットの裸体は当時どのように写っていたのだろうか。

当時、女性に「貞節」「忍耐」を求めたジェンダー規範からから見ると、一糸纏わぬ女性の姿はその固定概念から大きくはみ出ており、文学的にも歴史的にもスキャンダラスの対象となった『チャタレイ夫人の恋人』を彷彿させる。ロレンスは絵画にも長けていたがその大半が裸体を描いたものであったため卑猥であるとされ『チャタレイ夫人の恋人』同様、展示会の禁止命令が出された経歴がある。ロレンスにとって「裸」は重要な意味を果たすものであり、自然の恵みを体全体で感じることに素足で大地を踏みしめることで世の中の疎ましさを全て忘れ去ることができると考えているようだ。何にも捕らわれないそのままの人間の姿を小説でも絵画でも訴えかけたかったことが見受けられる。『太陽』の執筆を1925年冬に始め、翌年『チャタレイ夫人の恋人』を書き始めていることから当時のロレンスの関心事が「女性の自然回帰」であったことは想像に難くない。

このように、古い男女観を根底から揺るがす女性たちが世間を賑わし出した時代の中、ジェンダー規範の逸脱に当てはまるのがジュリエットの視線の強さである。彼女の視線の先には農夫が待ち受けており、農作業をしている姿が瑞々しく描かれている。

Going slowly home in her nakedness down among the bushes of the dark ravine, one noon, she came round a rock suddenly upon the peasant of the next podere, who was stooping binding up a bundle of brush-wood he had cut, his ass standing near. He was wearing summer cotton trousers, and stooping his buttocks towards her. It was utterly still and private down in the dark bed of the little ravine. A weakness came over her, for a moment she could not move. The man lifted the

bundle of wood with powerful shoulders, and turned to the ass. He started and stood transfixed as he saw her, as if it were a vision. (P433)

ジュリエットの目の前に農夫の大きなお尻が現れ、動揺した彼女は身動き取れなくなってしまう。農夫も同様、ジュリエットの裸体に目を奪われ、幻想を垣間見たかのようにジュリエットに眼差しを向けたまま茫然と立ち尽くしてしまう。その後も農夫はジュリエットから視線を離せないでいる。

Then his eyes met hers, and she felt the blue fire running through her limbs to her womb, which was spreading in the helpless ecstasy. Still they looked into each other's eyes, and the fire flowed between them, like the blue, streaming fire from the heart of the sun. And she saw the phallus rise under his clothing, and knew he would come towards her. . . . . But now the strange challenge of his eyes had held her, blue and overwhelming like the blue sun's heart. And she had seen the fierce stirring of the phallus under his thin trousers : for her. And with his red face, and with his broad body, he was like the sun to her, the sun in its broad heat. . . . She felt him so powerfully, that she could not go further from him. (P433)

農夫の眼差しは、今まで太陽の光に抵抗し続けていたジュリエットの子宮に突き刺さる。そして、抗うことがでずにジュリエットは農夫の視線を浴びたまま、うっとりとして半分意識を失った状態で農夫を見つめ返している。ここで、ジュリエットは農夫のファルスの力を感じており、ジュリエットが農夫に与えた衝撃が計り知れないことが分かる。そして、ジュリエットは、彼の挑みこむ視線を太陽の暖かさと同じ視するのだ。その後、ジュリエットは、農夫の生命力に溢れた暖かな眼差しの虜になり、農夫から離れられなくなる。視線について、戯曲における想像力についての語り口で羽振りを利かしているピーターブルックスは、「視覚は根本に男性が持つ特権であり、その対象となるのは女性の肉体である」と語っている。確かに、ジュリエットの豊満な肉体が農夫の視線の対象にはなっているが、今回、見られる側のみに落ち着いているわけではない。ジュリエットもまた農夫に視線を向けていて、農夫が見られる側にいることもこの引用から判明する。農夫と目が合うことから、ジュリエットの眼差しの強さを思い知ることができる。本能に赴くまま自身の欲望を体現化していくジュリエットの姿から、家父長社会からの自立が伺える。と、同時に転地前には見られなかった主体性を持ち合わせてきたことが彼女の眼差しの強さから判明する。ローラ・マルビイは視覚について、「見るという行為を通し、他人を性欲の刺激の対象とすることによって生じる喜びに由来する。」と論じており、この論をジュリエットの言動と照らせ合わすと、農夫に



対する好奇心はジュリエットの眼差しに代わり、ジュリエットの目には農夫が性の対象として映っていると解釈できる。このように、元来、見る側であったはずの男性が、女性によって見られ、本来あるべき「見る―見られる」の支配関係がジュリエットと農夫間では実に曖昧になっている。男性が客体されていく中、農夫は見られる側に回ることによって消極的な立場に立っている。そして、この眼差しの強さを内面化することでジェンダー論の逸脱を生じさせる発端となるのだ。というのも、当時、見る行為の主体は男で見られる女という固定概念が支配しており、主体的に女性が行動を起こすことをタブー視されていた時代背景が存在するからだ。それゆえ、積極的に「見つめる」その行為そのものが実は、ジェンダー規範に抵触する危険性へと繋がるのだ。

## 2. 農夫、夫モーリスの人物像

見る側にも見られる側にも立たされている農夫だが、ジュリエットが恋焦がれる男であり、肉体的な魅力を兼ね備えた人物である。注目すべき点は夫モーリスとの会話は直接話法で冒頭部分から明記されているのに、ジュリエットとの会話描写はなく、間接話法ですらそれが存在しないことだ。これを象徴するかのように、農夫には「名前」が存在しない。具体的な表現を避け、抽象的な言い回しで存在している点から、作者は故意に言い落としているのが分かる。このように農夫は太陽と共に象徴的な存在に位置付けられていることに気付く。太陽の青い光さながら、実体が見えない農夫は太陽と同様にまぶしくて輪郭すら浮かび上がらない実に曖昧な存在である。ちなみに太陽は「男性」をイメージする。

さて、ジュリエットと農夫との接触が実際にあったのかどうか定かではない状態でありながら、両者の意思疎通が見えないところで繋り合い、進行していつているような不思議な感覚を覚える。ロレンス特有の無意識と意識の交錯下で織りなす男女関係が静かに描かれている。

物語は中盤、「転」に差し掛かるところで、ジュリエットのシチリアでの楽園生活に水を差すのが夫モーリスである。不意打ちに現れたモーリスの姿は、農夫と出会った後のジュリエットにとって、夫は、枯渇した存在にしか映らなかった。語り手もジュリエットの思惑を踏まえた上で幾分皮肉を込めてモーリスについて語る。ここで農夫とは対極化にある夫モーリスが浮き彫りになる。

At table she watched her husband, his grey city face, his glued, grey-black hair, his very precise table manners, and his extreme moderation in eating and drinking. Sometimes he glanced at her furtively, from under his black lashes. He had the uneasy, gold- grey eyes of a creature that has been caught young, and reared entirely in captivity, strange and cold, knowing no warm hopes. Only his black eye-

brows and eye-lashes were nice. She did not take him in. She did not realize him. Being so sunned, she could not see him, his sunlessness was like nonentity. (P440)

ここでは極端に虚弱的で都会的なモーリス像を知ることができる。とりわけ夫に対する生理的嫌悪感が描出されていて、自然界と一体化したことによって、ジュリエットは夫の枯渇した生命力を受け入れることができず、ジュリエットはモーリスへの印象をますます悪くするだけだった。その結果、妻と向き合うことができずにいるモーリスをジュリエットは存在が無いものとしてみなしている。転地直後では、農夫がジュリエットにとって「太陽」のような存在であったのに関わらず、ニューヨークから妻を迎えに来た夫モーリスの目には、ジュリエットが「太陽」のように眩しくて直視できない存在に映っている。言わば第三者の視点により、ジュリエットと農夫が同次元に位置し、互いに太陽のよう瞬き合っていることを確認できる節なのだ。また、「太陽」が男性を意味することから、ジュリエットは転地によって「勢い、行動力」といった男らしさの要素をシチリアで新たに獲得したことが分かる。そして、農夫とジュリエットは、「太陽」という象徴を基盤にして互いに繋がり合い、心身共に一体化していることが推し量れる。このように、当時の「女」の固定概念を超え、「男」の領域まで踏み込み出したジュリエットのたくましい姿をモーリスの出現により再確認することができるのだ。

さて、妻の出方に怯えている臆病な自分を妻に知られたくない思いと、危機迫る妻の存在感到に惹きこまれ、幾文取り乱した妻に官能さを感じているモーリスには、優柔不断であり、正当な「夫」、「父」としての偉大さが抜け落ちている。すなわち、ジュリエットの前では、支配される側に回っていて、精神的に腑抜けの状態であることが伺い知れる。妻ジュリエットの野性性により、ニューヨークに居た頃より一層、消極的で弱い立場に立たされているのだ。この点は、今日の“fatherless”社会を物語る上で、女性台頭の兆しは切っても切れない関係であろう。

この作品以外にも短編『プリンセス』、長編『ロストガール』、『処女とジプシー』という作品で肉感的で野性的な男に惹かれ自分の知らない世界へ誘われる世間知らずのブルジョワ階級の箱入り娘が描かれている。三作品とも、女性の内に眠っている冒険心を示唆しており、今回のジュリエットの外へ外へと自身を解放していく様子と通ずる。父権社会で抑制されている時代背景で見落としがちな女性のこうした外に向けられた好奇心、探究心に眼差しを向け、作者ロレンスは彼女たちに理解を示しているのが分かる。だが、その一方で、作者はジュリエットを始め、女性主人公たちに対する共感値に一定の限度を設けている。すなわち、彼女たちに明確な「ハッピーエンド」を用意していないのだ。

## 第二章 ロレンスの立場

### 1. ジュリエットへの嫌悪（夫、息子視点）

ロレンス研究家、鉄村春生は『太陽』の構成について、太陽＝農夫を子宮で受け入れてきた彼女のストーリーの習性からすれば、農夫選択による決着が明らかなはずであるが。この種の作為、不自然さはどう処理したらいいのであろうか。と疑問を投げかけ、その結果、「妻」としての社会通念が農夫との別れを引き起こしたと結論付けている。確かに、ニューヨーク在住のひ弱な夫にジュリエットを戻らせることで女性進出のルールが轢かれていないことを暗示したことは十分に理解できる。当時の社会状況から見ても、女性が男性の手から離れ独立していくことに寛容ではないのが事実だからだ。だが、果たして作者は最終的に「社会通念」を読者に示すためだけにこの作品を創造したのだろうか。

He was thinking visionarily of her in the New York flat, pale, silent, oppressing him terribly. He was the soul of gentle timidity in his human relations, and her silent, awful hostility after the baby was born had frightened him deeply. Because he had realized that she could not help it. Women were like that. Their feelings took a reverse direction, even against their own selves, and it was awful - devastating. Awful, awful to live in the house with a woman like that, whose feelings were reversed even against herself. He had felt himself borne down under the stream of her heavy hostility. She had ground even herself down to the quick, and the child as well. No, anything rather than that. Thank God, that menacing ghost-woman seemed to be sunned out of her now. (P439)

この引用では、ニューヨークのフラット、すなわち文明社会下で暮らしているジュリエットの様子が描かれている。ここで当時の社会状況について言及すれば、ビクトリア朝のブルジョア階級では、家庭に従事し夫に仕える「家庭の天使」と呼ばれた女性たちが世間体ではスタンダードな呼び名であった。だが、男性の人口が結婚適齢期の女性に追いつかないという原因から、家庭には入らず自ら仕事を獲得し社会的な自立を謳う女性たちが現れ始めた。彼女たちを「新しい女」と呼び、旧弊した道徳観に縛られた人間には良くも悪くも奇妙な印象を受けていたようだ。当時の様子は『パンチ』で風刺画として描かれており、また同時に小説でも冷遇されており、主人公の結末は「出る杭は打たれる」しかないのだ。彼女たちの特徴は、男性に経済的に依存することを厭い、結婚そのものを男性への隷属的な制度と考え、精神的、経済的な自立を求めたことだ。また、女性のセクシャリテの解放にいち早く目を付けたのも「新しい女」である。時に男性を脅かすまでの女性陣のセクシャリテは、まさに『太陽』のジュリエットを物語っている。さらに「新しい女」の登場に伴って表出したの



が「女性参政権運動」である。この運動で今まで抑圧されたセクシャリテの爆発が露呈され、性的に自立心を持った女性の象徴と揶揄される。

このような時代背景を踏まえるとジュリエットは、閉じ込められた空間で「妻」と「母」の役割に徹する「家庭の天使」を演じてはみたものの、時間の経過と共に無理が利かなくなり、その役を演じ切れなくなったため、その役を潔く降り、自身の本性へと走った部分である。語り手は、モーリスはそのジュリエットの本質部分に関して、“Because he had realized that she could not help it. Women were like that.”と表記しておりモーリスのジュリエットに対して諦めの観念を示している。注目すべき点は、妻ジュリエットのみには不快な感情を抱いているのではなく、女性一般、“woman”に対して夫、父の立場から、「どうすることもできない。女はそういうものだ。」と割り切り、自ら解決策をあえて見つけ出そうとはしない点だ。女性の本質部分に触れたモーリスの嫌悪感が根底に流れている証であろう。

このように、男が理想とする「家庭の天使」を強要されることで生じるジュリエットの不平不満は、モーリスを肉体的にも精神的にも辟易させてしまうのだ。この引用でジュリエットの様子は、端的に“Their feelings took a reverse direction, even against their own selves, and it was awful – devastating.”と表現されており、本来の流れとは逆方向に向かう、すなわち、「家庭の天使」から遠ざかっていくジュリエットのおぞましさを読者に知らしめしている。そして、沈黙を貫くジュリエットの重々しい態度に、モーリスはお手上げ状態なのだ。それゆえ、モーリスは、妻ジュリエットの一挙一動に怯え、その緊迫感に耐えられなくなり、ジュリエットを転地させたのだ。ジュリエットに気を揉むモーリスの疲労感と倦怠感が如実に語られている場面である。

このように、ジュリエットとモーリスのニューヨークでの暮らしを考察すると、夫モーリスの妻ジュリエットに対する恐怖心が顕著に表現されているのが読者に十分伝わるのだ。ニューヨークでの引用では、全てモーリス視点から語り手を通じて妻ジュリエットの悪魔的な本質部分が語られていたが、これ以外の箇所では、息子の立場から母ジュリエットの嫌悪感が語られている。

She knew it even in her little son. How he mistrusted her, now that she laughed at him, with the sun in her face! She insisted on his toddling naked in the sunshine, every day. And now his little body was pink too, his blond hair was pushed thick from his brow, his cheeks had a pomegranate scarlet, in the delicate gold of the sunny skin. (P429)

ジュリエットが息子を嘲りに近い形で笑ったので、息子が母に不信感を抱いている様子が描かれている。そして、その後、半ば強引にジュリエットは息子に日光浴を強制するのだ。

“insist”を使用することで、ジュリエットが息子に専制的に裸体になることを要求したと推測できる。息子から見ると母ジュリエットはこの引用部分では支配者の立場に君臨していて、そのような母親に息子は安心できないでいる。この作品内で唯一息子の立場から母への嫌悪感を滲ませている箇所であり、先に見たモーリスの妻に対する不快感と重なって、語り手、もしくは作者の意図を解する上で貴重な引用部分である。

## 2. ロレンスの女性嫌悪

また、作品外では、ロレンス自身のエッセイで母親について言及している。エッセイで作品内の人物を介してではなく、自身の言葉で女性に対する思いを切々と語っている。まず、この論文の要になっている「母親」について端的に表現しているエッセイを抜粋する。

My destiny has been cast among cocksure women. Perhaps when man begins to doubt himself, woman, who should be nice and peacefully hen-sure, becomes insistently cocksure. She develops convictions, or she catches them. And then woe-betide everybody. It began with my mother. (P413)

この引用は「女は独善的である」と題されたロレンスのエッセイである。「わたしは、これまで独善的な女たちの間に投げ込まれる運命にあった。おそらく男が自分に対する確信を失い始めると、本来、思いやりがありメンドリのように穏やかであるはずの女が、強く自己主張をするオンドリとなる。それから、女は信念とするものにしがみつくな、あるいはその信念をますます強固なもとするかである。そうになると、悲しみがあらゆる人に降りかかることになる。わたしの場合は、まず母だった。」と表明し、男性が陣弱体化していくと、女性がたくましくならざるを得ない状況が生じ、家族で言えば父の権力低下に伴い母の存在が強化される。そういった場合、母には「自己主張」の権限が与えられ、引用にもあるようにメンドリがオンドリに変貌する。ここまで見れば、母親の権威が増しただけに聞こえるが、そのあとに続く「悲しみがあらゆる人に降りかかることになる。」という表記から、自分に悪い影響を与える母親に嫌悪感を抱き、さらに、母親が権威を奮うことを好ましく思っていないことが判明する。このように、ロレンスの場合、生まれて初めて接する女性、母親が「偽善的な女」に該当したのだ。末っ子として育て上げられ誰よりも母からの愛情を注ぎこまれたロレンスだが、その母の愛情が大きすぎたがために、子供にとっては大きな負担になり、無意識下で束縛を感じてしまっていたようだ。そのロレンスの心境が、『息子と恋人』のポールに反映されていたのではなかろうか。母の期待が子供の人生に大きく関与していく様子が描かれていた。具体的に、母親が人生の黒幕的な存在となり、ポールの恋人選び、仕事選びと、人生の大事な決定的瞬間に母親の影がちらつき、自分の意志よりも先に母親がどう思

うかが中心軸になっていた。興味深いことに、実生活でも、ロレンスは女性に支配されているといった意識が心の中で蠢いていたようだ。

And then what would she not have given to have her life again, her young children her tipsy husband, and a proper natural insouciance, to get the best out of it all. When woman tries to be too much mistress of fate, particularly of other people's fates, what a tragedy!.....It is dangerous for anybody to be cocksure. Being basically a creature of emotion, she will direct all her emotion force full on to what seems to her the grand aim of existence. (P413)

この引用も同じく、「女は偽善的である」からの一節である。「女が運命の支配者であろうとしすぎると、特に他の人たちの運命を支配しようとする、ひどい悲劇が起こるのである。女が自分の運命、さらに近くにいる人たちの運命を支配するようになると、必ず彼女は自分の運命だけでなく他の人たちの運命をも無茶苦茶にしてしまうのである。女は基本的に感情の動物であるので、自分にとってその生の壮大の目的と思われるものに情念の力をすべて集中してしまうことになるからである。」と、女性に対して否定的な見解を述べている。母からの負担を「束縛」と表現したが、ロレンスはその束縛を「支配」と定義している。そして、一度、女が支配者になれば周囲をも巻き込み負の存在となりえることを否定的に語っている。母親の息子に対する強い思いが、皮肉にも裏目に出て「母性愛」の印象を悪くしてしまっているのだ。そして、母親の強い影響で女性の本質を「感情の動物」と、極めたことが分かる。

さらに、ロレンスは女性について痛烈な皮肉を込めた言葉を「ほんとうのもの」というエッセイで残している。

That young men know that most of the "Benevolence" and "motherly love" of their adoring mothers was simply egoism again, and an extension of self, and a love of having absolute power over another creature. Oh, these woman who secretly lust to have absolute power over their own children....."My mother is trying to bully me with every breath she draws, but though I am only six, I can really resist her." (P507)

この引用で、「若い男たちは、その敬愛する母親たちの「慈愛」や「母性愛」なるものも、エゴイズムにすぎず、自我の拡張、ほかの生き物に対して絶対的な力をふるいたいという形での愛であることを、よく知っているのである。ああ！己のために、自分の子供に対して絶

対的な力を奮いたいという邪欲をひそかに抱いている女たちよ。僕のお母さんは、何かを言う度に僕をいじめようとしている。僕はまだ六つだけれど、お母さんに歯向かうことだって、ほんとうはできる」と言いたい気持ちを読みとることができる。」と、ロレンスは子供の視点から母親への反感を露呈していることが分かる。

「母性愛」の正体は、母の「エゴ」に他ならず、結局は子供を自分の思う通りに操る支配人になりたいという母の欲望を暴き出している。ロレンスにとって母とは、運命を左右するほどの強い影響を及ぼした人間であり、その存在に疎ましさを感じながらも、抵抗することができなかった存在と解釈できる。そもそも人類はみな母のお腹から生まれる。このように、「母親」、「母性」とは嫌悪感を抱きながらも、自己から離れられない危険な魅力を備えたものと解することができる。

### 3. プロットの変更

このような女性嫌悪は先に述べた「新しい女」の誕生という歴史的変化と繋がる。作者の無意識下で流れる女性への抵抗感により、女性を男性原理社会から解放させたいが、太陽の下で開花された強いセクシャリテを持ったジュリエットのような女性を、男らしく受け入れることが出来ない男性の臆病さがモーリスに反映されているのではなかろうか。それゆえ、シチリアとは対極化にあるニューヨークに連れ戻し、女性性を封じ込めた扱いやすい女性に引き戻す必要性を感じ、その結果、最終的に強く惹かれあつた農夫との別離を用意したと解釈できる。

さらに言えば、終盤、この結末に集結させるためにジュリエットの心理描写にも変化を付けさせたのか、想いを寄せる農夫に個人的な関わりは避けたいとジュリエットと明言している箇所がある。前半部分、農夫に出逢い心も体も火照っていたジュリエットとは真逆状態にある。そして、ジュリエットは、農夫は決して自分の元へはやって来ないと強く確信しながら断定している。何度も誇張して農夫との別離を心の中で叫ぶ。

Feeling her look at him, he flung off his old straw hat, showing his round, close-cropped brown head, and reached out with a large brown-red hand for the great loaf, from which he broke a piece and started chewing with bulging cheek. He knew she was looking at him. And she had such power over him, the hot inarticulate animal, with such a hot, massive blood-stream down his great veins! (P441)

この引用での表現を見ると、農夫への否定的な言い回しが見て取れる。“And she had such power over him, the hot inarticulate animal, with such a hot, massive blood-stream down his great veins!”ジュリエットの農夫への恋愛感情が変わってきたことを知ることがで

きる。そもそも、ジュリエットはシチリアの熱い太陽の元で精力的に働いていた農夫の姿に野性性、原始性、躍動感を見初め、子宮を通じて体全体で激しく彼を求めていたのだが、ここに来て農夫の野性的な姿にジュリエット自身違和感を覚えている。そして、ジュリエットが農夫に惹かれた動物的な所作が気に入らないと言及されているのだ。もはや、彼女にとって農夫は“animal”にすぎない存在になり、人間の範疇にもカウントされない。

このようなジュリエットの急激な心変わりは、少々突発的で、不自然さを感じずにはいられない。では、なぜ、作者ロレンスはジュリエットを豹変させたのだろうか。そこには、家父長社会に引き戻すのに都合のいいようにジュリエットを無害化したロレンスの深層心理が伺える。すなわち、ジュリエットが夫モーリスの元へ戻らざるを得ないように裏から操作し、農夫への恋心を絶ち切らせたということだ。まさに現代版「ロミオとジュリエット」である。具体的に、俯瞰の視点でジュリエットの熱くなった精神と肉体を冷めさせるために、「ジュリエットの農夫への不満」という仕掛けを投じたのだ。引用箇所は、まさに、その仕掛け部分である。夫モーリスへの欺瞞と肩を並べるくらいの勢いを持つ。

このように考察すると、ジュリエットを夫権社会に戻らせたのは、男性原理社会の形式を覆しかねない女性陣の本能を封じるために作者ロレンスが取った意図であると解釈できる。そしてその背景には、何度も言及しているジュリエットの太陽の元で開花されたセクシャリテにある種恐怖と憎悪を感じてしまう男性陣の臆病さと、ジェンダー規範という所定の型にリセットさせなければという焦りが最後の結末の根底に流れている。絶対的な権力を行使できる「作家」は作品内の人物を思うがまま操ることができる。ロレンスを含め男性陣には都合の悪い型破りな女性は、当時の「貞潔」を重んじられたジェンダー規範からは大いにはみ出ている。それゆえ、ジュリエットを太陽から日陰に引き戻し、文明社会という殻の中で爆破的な生命力をもう一度抑えつけることが先決であった。

ここに読者は「相思相愛でも叶わない恋」を連想させられるが、実のところ、ジュリエットの恋愛で目覚めたセクシャリテを弱めさせるための巧妙に仕掛けられた設定ではなかろうか。ちなみに、「ジュリエット」はイタリア語で「若さ」を意味し、ここにもセクシャリテを持たないまだ未熟なままの状態で主人公を留めておき、ジェンダー規範から逸脱させないようにといった男性側の理想が込められているとも読み取れる。

そしてもう一点、プロットを転換させるような不自然さにモーリスの中盤から終盤にかけての男性性の回復が挙げられる。ニューヨークでの都市社会に埋もれていたはずのモーリスがシチリアでのジュリエットの肉感さに目を眩ませ、欲望を抱き始めるのだ。この点はジュリエットの運命を翻弄させる大きなきっかけとなるので引用を交えて考察していきたい。

He felt, in his far-off depths, the desire stirring in him for the limbs and sun-wrapped flesh of the woman : the woman of flesh. It was a new desire in his life,



and it hurt him. He wanted to side- track. (P437)

肉感的な妻を目の前にしてモーリスに新たな欲望が生まれたというのだ。だが、彼はその事実に狼狽し、本来あるべき姿、紳士的な自分を理想化しているがゆえ、妻の開花された魅力を拒絶している。その様はまるで、妻に欲情を覚える自分に罪を負わせているかのようだ。妻の方はどうかと言えば、一定の距離感を保とうと必死に努力しているモーリスを横目に、自身の豊満な肉体をモーリスの視線に無意識ながら惜しみもなく注げている。自己の欲望にブレーキをかけているモーリスだが、彼女の自由奔放な姿は、モーリスの理性のかたを外れさせてしまう。

Her husband followed, watching the rosy, fleet- looking lifting and sinking of her quick hips, as she swayed a little in the socket of her waist. He was dazed with admiration, but also at a deadly loss. He was used to her as a person. And this was no longer a person, but a fleet sun-strong body, soulless and alluring as a nymph, twinkling its haunches. What would he do with himself? He was utterly out of the picture, in his dark grey suit and pale grey hat, and his grey, monastic face of a shy business man, and his grey mercantile mentality. Strange thrills shot through his loins and his legs. He was terrified, and he felt he might give a wild whoop of triumph, and jump towards that woman of tanned flesh. (P438)

ジュリエットの後ろ姿から、ウエストのくびれ、薔薇色をしたお尻が見受けられ、また、彼女のウエストが動くたびにお尻も上下揺れ動く様子が描かれている。その姿は人間の枠を通り超えて精霊の域に達したと語られている。そもそも、“nymph”とは、半神半人の美少女の妖精を意味し、ここでの人間の次元を超えた神々しさと、太陽にやかれた強靱なボディを纏ったジュリエットの裸体をそのまま映し出している。このような彼女の誘惑的で神秘的な佇まいにより、モーリスの精神、または理性は、“Strange thrills”に完敗しそうなのだ。そして、その彼女のオーラはモーリスに戦慄を呼び起こし、彼女に飛び掛かり自分の物にしたいという狩猟本能を伴った鋭い感覚を甦らせる。今にも躍りかかりそうな妻への所有欲が痛いほどモーリスの四肢突き刺ささり始めたのだ。すると、モーリスの体にも変化が起きる。

There was a gleam in his eyes, a desperate kind of courage of desire to taste this new fruit, this woman with rosy, sun-ripening breasts tilting within her wrapper. (P442)

上記の引用は、拒絶しながらもジュリエットの魅力に吸い込まれていくモーリスが描かれており、ジュリエットに肉感的な欲望を覚え、徐々に男性性が目覚めていく過程が見て取れる。そして、その勢いは引用部分からでも明白なように、最終的に農夫の勢力に匹敵するまでになる。段階を追えば、まず、新たな肉欲の目覚めにもがき苦しみ、自己抑制を試みるが、湧き上がる衝動に太刀打ちできなくなり、心のブレーキとは裏腹に勢い付く。開花した妻に魅惑されながらも、その魅力に屈服してしまうことを強く拒絶している。自己規制に余念がないモーリスは、妻に対して魅惑と嫌悪感を抱き、彼女に手も足も出ない。モーリスの優柔不断さが心の苦悩、葛藤に繋がっているのが見える。

このように話の転とも言える箇所でもモーリスが妻の生き生きした姿を目の前にして、自身の内に男性性が生じていることにひどく困惑していく点から、女性という生き物に備わった魔術的な魅力に迷いながらも、そこに踏み込むのを思い留めているモーリス像には、女性からの自己防衛というロレンスの潜在意識が投影されているのではなかろうか。

最終的には、モーリスの目に光が宿り、ジュリエットへと挑みこむ勇気が整い、妻を新鮮なフルーツに例え、それを味わいたいと願い始める。心の動揺は体の反応に繋がり行動的に、そして原始性を帯び野性性を秘め始める。この一連のモーリスの流れは、猫が獲物を見つけ、焦点を当て、静かに腰を屈め、飛びついて捕えるまでの過程を、実写化しているかのようだ。これらのモーリスの身体的な回復は、ジュリエットが農夫と初めて出会ったときの様子を彷彿とさせる。というのも、農夫がジュリエットを見初めたとき、彼は、ジュリエットに抑え切れない肉体的欲求を覚えていたからだ。そのときの様子は反射的に農夫がジュリエットに感応していた。終盤に来て、作者はモーリスに農夫ほどの性的エネルギーを付与させたことがここで明らかになる。

このように、ジュリエットの魅惑的な風貌がきっかけとなって、モーリスも農夫同様に「男性」の範疇にしっかり収まるだけの根源的な男らしさを取り戻すのだ。それゆえ、二人の男性、モーリスと農夫の間でジュリエットが振り回される結果となる。だが、ジュリエットに二人の男性が脇を固めたとき、突然、彼女は夫モーリスに身を捧げる趣旨の決意を語り出すのだ。

And the flower of her womb went dizzy, dizzy. She knew she would take him. She knew she would bear his child. She knew it was for him, the branded little city man, that her womb was open radiating like a lotus, like the purple spread of a daisy anemone, dark at the core. She knew she would not go across to the peasant; she had not enough courage, she was not free enough. And she knew the peasant would never come for her, he had the dogged passivity of the earth, and would wait, wait, only putting himself in her sight, again and again, lingering across her

vision, with the persistency of animal yearning. (P442)

ここで、ジュリエットはモーリスを受け入れ、彼の子を産む運命にあることを悟り、その原因は夫のせいであろうと断言している。興味深いのは、父親モーリスに対しては、「太陽を見たこともないウジ虫のような子供にはしたくない」と宣言し、また、夫モーリスに対しては、農夫の外見と比較して「都会的で太陽の暖かさを知らない人」と侮辱していたのにも関わらず、最終的には、ジュリエットの子宮は夫モーリスのために放射状に開き始めたと自分に言い聞かせ、今まで抱いていた農夫への肉体的欲求を自ら途絶えさせている点だ。そして、夫モーリスへの元と帰る終幕が見えたのと同時に、ジュリエットの農夫の扱いも極端に乱雑になる。というのも、この引用でも農夫を“animal”と呼び、血の通った人格としてみなしていないからだ。歴史的背景を調査する際に、「視線」について、農夫が見られる側にも立っていて消極的な立場に立っていると言及したが、それを反映するかのよう、農夫には正式な「名前」が与えられていない。

そして、会話もモーリスとジュリエット間では直接話法で明確に表現されているのに対し、語り手による間接的な言い回ししか見受けられなかった。この点からも、あえて作者は、農夫の具体的な情報を省き、彼の存在意義を曖昧にした可能性が考えられる。その効果もあって、農夫との恋愛をジュリエットの夢の次元で止めることに成功している。ジュリエットが農夫に深く関与させないようにあらかじめ準備しておいた仕掛けでもあるかのようだ。

さらに、ジュリエットの目に映る農夫が、ある時は「太陽」に、またある時は「動物」に見える。このような役割の振れ幅を大きくしている原因に、繰り返しになるが、すでに言及した農夫の「曖昧さ」が挙げられる。すなわち、ジュリエットの心象風景によってどちらの役にも転がることができる農夫の配役不透明さが感じられるのと同時に、ジュリエットにとって農夫が安定した存在でないことが伺える。そして、農夫の登場が第4章から始まっている点から、始めからジュリエットとの関わりを削減した形を取っていることが分かる。あらかじめ、ジュリエットと農夫との恋愛を成就さない策略として、作者は農夫の登場を遅らせ、故意に具体的なジュリエットとの交わりを言い落としたのではなかろうか。

ラストには、より現実的な描写をもってジュリエットの宿命が語られている。悲劇的な香りを漂わせてヒロインの未来を断ち切っている。このように、モーリスの「男性らしさ」の回復に対応して、ジュリエットの心情も急激に変わっていったことが伺える。突然モーリスへの元へと戻らざるを得ないことを悟り、彼との子供を産むであろうことを半ば強制的に自分自身に言いきかせるのだ。先に見た、「農夫への不満」と相乗効果をもたらす意味でも、モーリスの男性性の回復はジュリエットを「男性原理社会の鎖」に再び戻らせる決定打になる。モーリス側の受け入れ態勢を万全にして、そこにジュリエットが舞い降りることができるよう、すなわち、農夫を諦めてジュリエットが夫モーリスに戻りやすい状況を創り上げ

たのではなからうか。

#### 4. 結論

家父長社会の犠牲者として同情する一方で、女性嫌悪の観点からジェンダー規範から逸脱する女性を解放しきれないロレンスの曖昧な立場が、筋立てに影響を及ぼしたと解釈することができる。このように、ジュリエットの急激な心変わりの根底には、農夫と初めて出会ったときのような直観的な研ぎ澄まされた感覚を欠如させ、ジュリエットをモーリスのような頭脳派、言わば鎖で繋がれていた文明社会の人間にすり代えていることも後々判明する。そうでなかったら、恋愛対象の人物を“animal”呼ばわりしないはずだ。

このように、一連のジュリエットの心の推移と男性陣の動きを注意深く追っていくと、両者は密接に繋がっており、ジュリエットの肉体と精神が夫モーリスと農夫によって支配されていることが判明した。さらに、ジュリエットに怯えるモーリス像に作者自身が投影されていることも、ロレンスのエッセイから感知することができ、作者の「女性嫌悪」といった深層心理、あるいは「男性原理主義」といった本音が見えてくることが証明できた。

実際、エッセイでも語られていた作者の無意識な女性嫌悪感は、作品内で多くを占めるわけではないが合間、合間に挟まれており、その負の感情は、最終的にジュリエットの生きざまを変えることになったのだ。無意識にロレンスの女性への恐怖心がジュリエットの心理描写にも作用した結果と言えるだろう。

(使用テキスト)

*D. H. Lawrence : Complete Essays* (Blackthorn Press, 2009)

*D. H. Lawrence : The complete short stories* (THE VIKING PRESS, 1973)

*D. H. Lawrence : Selected Selected short stories* (PENGUIN BOOKS, 1982)

(参考文献)

朝日千尺著、『D・H・ロレンスのフェミニズムを読む』（英宝社、2000）

井上義男著『ロレンス—存在の闇』（小沢書店、1983）

小川和夫訳、D・H・ロレンス著『精神分析と無意識』（南雲堂、1987）

木村公一、倉田雅美、宮瀬順子編、『D・H・ロレンス事典』（鷹書房弓プレス、2002）

楠明子著、『英国ルネサンスの女たち』（みすず書房、1999）

田中実著、『ロレンス文学の愛と性』（鳳書房、2003）

鉄村春生著、『想像力とイメージ—D・H・ロレンス 中短編の研究』（開文社、1984）

羽矢謙一訳、D・H・ロレンス著『愛と生の倫理』（南雲堂、1976）

吉井三夫著、『ロレンス文学の神髄』（北星堂書店、2001）

## The aim of “The Sun”

KONDO, Mari

Juliet, a middle-class young woman, leaves her husband Maurice when she travels by ocean passage with her son, a nurse, and her mother to Italy. And there, near the roots of a cypress tree, being exposed to the strong sun, she feels her body warming, and got a sense of physical consciousness. Then Juliet met the unknown healthy peasant and fantasizes of an affair with him but her wish does not come true.

“The Sun” has been pointed out by previous researches that Lawrence illustrates the state of patriarchal society through the sad ending of Juliet. On this matter, this paper takes a little bit different approach from previous studies of “The Sun”

I focused on two points. At first, a noteworthy example is that the peasant is nameless; moreover he does not have a conversation with her directly, in spite of the important character. Lawrence treats him as the vague character. Secondly, there are more or less the descriptions misogynistic in this story. In a sense, Lawrence often demonstrated distrust and fear of the power of women. The point is that Lawrence was afraid of woman, so Juliet's fate was decided by him in advance. Therefore he controlled gender role, and by doing so, he succeeded in making Juliet leave the peasant easily.

In this way, I concluded that Lawrence's philosophy on sexual relationships and love as depicted in “The Sun” was constructed as misogynistic.